
漆黒の騎士と白衣の天使

reki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漆黒の騎士と白衣の天使

【Nコード】

N7208Y

【作者名】

reki

【あらすじ】

自分の生涯を思うがままに生き、世界の在り方を変えた漆黒の騎士。
そんな彼の傍らには常に一人の白衣の天使がいた…？

白衣の天使マジ天使！

そんな、かなりお馬鹿でちょっぴりシリアスな剣と魔法と戦争な物語。

登場人物紹介（前書き）

黒獅子旅団の人物設定です。

読まなくても問題ありません。

むしろネタバレを含んでいるので、先に本文を読んでから読む事を
オススメです。

登場人物紹介

黒獅子旅団とは。

イリシエン王国北部に本拠地を置く、賊やならず者の集まりである。人数があまりにも多くなると、北部の山の麓に黒獅子の街が造られた。

街は意外と治安がよく、団長のカリスマ性からか、人が多く集まり、黒獅子旅団は一つの国であると言われた。

軍部序列

団長

副団長

総司令官

各隊総長

各隊隊長

各隊副隊長

各隊班長

各隊副班長

各隊兵卒

* 主要メンバー *

団長

ルイシエン＝ヨジエワール

イリシエン王国ヨジエワール領の、首都ヴァレス出身。
イリシエンの貴族で最も位の高い公爵家に生まれたが、生まれた時

から魔法が使えたため、呪われし忌み子と教会に宣言される。
金髪碧眼の美形で少年時代は女の子に間違われる事が多かった。
母の病死後、黒獅子旅団（元は盗賊や不良の集まりだった）を結成し、国を変えようと駆け回ることになる。
武、魔、軍、政、知、商、詩などあらゆる分野に高い才能を垣間見せる天才。

副団長兼魔導隊総長

サクラ＝サカモト

日本人、坂本桜。

背は日本人の平均程度、少し痩せぎみ。

成績は文系が得意。理数は苦手で得意料理はハンバーグ。
温厚な父と過激な母に愛情を注がれ、健やかに育つ。

父の経営する精神病院で患者さんを励ましている。何故かナース服を着用しており、白衣の天使と自称していた。

転生後、不浄の森に捨てられ、森で育つ。

圧倒的な魔力と可憐な容姿を持って産まれるが、その言動は異常。
凄まじい殺気を放ち、首を狩ることが日常的な行為になっているため、ルイシエンには森の死神と評される。

軍総司令官

カイゼル＝サードレンシア

南西の没落貴族の出自で、元帝国騎士。

卓越した武術の使い手で、剣、槍、弓とそつなくこなす勇士。

黒獅子旅団に入った後、一躍有名になると、帝国は武神を捨てたとの噂が流れた。

その腕前は旅団内では勝てる者がいないほどであったため、武術師範代に抜擢され、団長ルイシエンも彼に武芸を教わっていた。

旅団が大きくなるにつれて彼の地位も上がっていき、最終的には軍総司令官となった。

歩兵隊総長

ライズⅡアツサム

ルイシエンの幼なじみ。

平民の生まれだが、ちょっとしたことからルイシエンと知り合い、そこから生涯の付き合いとなる。

団員から弄られることが多いが、実力は確か。

剣を使わしても槍を使わしても器用にこなす。残念ながら魔力は皆無であるが、ルイシエンに叩き込まれた軍略をものに行っているので、兵を率いての戦いも見事なものである。

役職一覧

団長

ルイシエンⅡヨジェワール

副団長

サクラⅡサカモト

総司令官

カイゼルⅡサードレンシア

歩兵隊総長

ライズⅡアツサム

騎兵隊総長

ライオネルⅡジェラル

弩弓隊総長

ウィグシルⅡハートーツン

魔導隊総長

サクラⅡサカモト

竜騎隊総長

チィⅡクーフーロン

諜報隊総長

リリースレンダーヘヴンアークスⅡレムレム

総司令官補助

ジェイクⅡラルク

ジェガンⅡラルク

歩兵隊隊長 12名 副隊長 12名

歩兵隊班長 30名 副班長 30名

騎兵隊隊長 8名 副隊長 8名

騎兵隊班長 20名 副班長 20名

弩弓隊隊長 5名 副隊長 5名

弩弓隊班長 17名 副班長 17名

魔導隊隊長 3名 副隊長 3名

魔導隊班長 11名 副班長 11名

竜騎隊隊長 3名 副隊長 3名

竜騎隊班長 8名 副班長 8名

諜報隊隊長 12名 副隊長 12名

諜報隊班長 48名 副班長 48名

第0話へプロローグ

旧暦1877年

イリシエン王国のとある貴族の家に一人の男が誕生した。

名を”ルイフェン”ヨジエワール”

後世に名を残す”漆黒の騎士”その人である。

何故、千を優に越す罪を重ねた大罪人が王に忠誠を尽くす騎士と呼ばれたのか。

何故、彼は皇国を壊滅的な危機に陥れても尚、破格の英雄と呼ばれたのか。

何故、黒き悪魔と罵れ呪われた忌み子と蔑まれた彼に付き従う者が数万人もいたのか。

何故、何故、何故。

彼の死後数百年を経った今も疑問は尽きないだろう。

私は彼の子孫として彼の研究に生涯を費やしてきた。

それでも尚、疑問は尽きない。

その最もたる存在がルイシエンに付き従ってきた人々の筆頭たる女性にして、自らを”白衣の天使”と称する奇跡の変人、サクラ”サカモト”である。

彼女の出自は全くもって不明であり、その能力、言動は他に類がないほど特殊なものであった。

一説には異世界人という説もあるが、それが一番彼女を言い表して

いる言葉とも思えてくる程である。

神秘的な黒髪黒眼で何を指して白衣の天使などと宣っていたのかは不明であり、治療と称して愛用していた細剣で病人の腹を切り裂いたという記述まである。

私は彼らの子孫として、彼らの謎を解き明かし、明確なる真実をいつの日か記す事を此処に誓う。

皇国暦526年 12月31日

アシクヨジエワール

第0話へプロローグ（後書き）

どうも、こんばんは！

最初っから致命的なミスを犯していました

が、修正しますた！

序盤は展開早すぎて作者もついていけません、楽しんで頂ければ幸いです！

第1話

――
――

どこだルイシェン！

屋敷内には居ないようです！

くそつ、あの馬鹿…今度は我が家に伝わる宝剣を持って行きやがった！

――――
――――

「ふん、なあにが宝剣だよ。こんな無駄に装飾ばかりされたナマクラ」

そう呟いて彼は馴染みの商人の家に入る。

この少年、家からコッソリ金目の物を盗んでは売りつけているのである。

「おやおや、今度は何を盗ってきたんだい？ルイシェン坊や」

商人の方もそんな事はお見通しのようで毎回からかってはいるが、実際に彼が持つてくる物は利になるので、結局買い取っている―所

謂共犯者である。

「坊やは止めてくれよ、それより今回は良いものを持ってきたんだ。期待してるぜ？」

そう言つて一振りの剣を手渡すルイシェン。

13歳の冬の日であつた。

結局のところ、剣は買い取つて貰えなかつた。

なんでも時の皇帝が我が国の国王に下賜し、更にそれをウチの御先祖様に下賜した物で世界に一振りしかない超貴重な物、らしい。その貴重さ故に、すぐに露見してしまう可能性が高いのだ。

「なあにが世界に一振りだ。俺の、そこらの盗賊から奪つたこの剣だつて世界に一振りだつつの。第一、……」

そんな大事なモン、ウチなんかに譲るなよ王様。

仕方ないので腰に佩して都をぶらりと散策する。屋敷に帰れば罵倒が待っているだけだ。

ここ最近は何目かの物を盗む時しか帰っていない。

母が病気で死んでから、ずっとこんな調子だった。

家を出て、悪友共と武装して馬を駆り、敵対している賊とやらを潰し吸収し、武具、馬等を奪い根城へ帰る。

根城に帰れば酒、賭博、女の毎日だ。

だが、それでも父の統治するこの都の人々からの支持はかなりのものだった。

なんせ、俺達の行いが都の治安を守っているようなものなのだから。俺は自分の家からは盗むが他人の物は盗まない。ただし、敵対していなければの話だが。

今の世は腐っている。

王族、貴族共は民から高い税を絞り尽くし帝国へ賄賂を送り官職を金で買い、更に権力を上げて金を絞る。

賊をもって賊を潰す。そして乱をもって乱を制す。それが俺だ。

いつの日か、今の腐敗仕切った王族、貴族を叩き潰してやる。

例え、それが唯一の肉親、父―ゼラード―ヨジェワールを殺す事になろうとも。

「俺のやるべき事は、変わりはない」

第2話

彼、ルイシェンⅡヨジエワールは何故ここまでひねくれてしまったのだろうか。

「ルイ、俺ら、あの餓狼旅団に睨まれてるらしいぞ?」

悪友達の一人、ライズが切り出した。

俺が立ち上げた、この名も無き一賊結成以来の古参幹部の一人であり、弓の達人でもあり、若干14歳の割には頭もそこそ良い。

俺と年も近く兄弟同然に育ってきたので気心も知れている。

因みに字が読めるのは幹部の最低条件である。

「餓狼旅団…なかやかデカイ獲物が掛かったじゃねえか。ライズ、幹部を呼んで軍議だ!それと、野郎共に久々に派手な戦を始めつから、酒と女を絶つように伝えておくんだ」

「了解した!」

餓狼旅団とは総勢4500人を越える山賊の一大勢力である。
グランレーヴェル帝国が統べるこの大陸は大まかに分けて五つの大

国で成り立っている。

まず中央には実質的な大陸の支配者が居座る、グランレーヴェル帝
国領がある。

北西の国、イリシエン。

北東の国、サイリウス。

南西の国、アンリッタ。

南東の国、ウルエチア。

我が国は北西の国イリシエンである。

国の北部は険しい山脈が広がっており、西部には雄大な海が見える。
父ゼラードが統治する都は中央王都の北部で、俺達の根城はそこか
ら更に北部、つまり山の麓にある。

ウチの一賊は1000人に届くか微妙な所に対し、敵は4500を
越えるとも言われている大勢力…何かしら策を弄すしか勝ち目は無
い。

「よう、大将、戦の匂いがするなア」

「丁度いい時に帰ってきたな、カイゼル。これから対餓狼旅団戦の
軍議だ。あんたも参加してくれ」

カイゼル、28歳。

その性質上、若い者が多い一賊の中では兄貴分の様な男だ。

三年前、つまり俺がまだ10歳の頃、立ち上げたばかりの一賊に最
初に喧嘩をふつけてきたのがこの男が率いる賊だった。

たしか遊廓から出てきた所を落とし穴に嵌めて、10歳前後のガキ
が寄ってたかつて袋叩きにしてた記憶がある。

まあ、ぶつちやけ1000人中400人は彼が連れてきた野郎共だ。

「くつくつ、餓狼旅団つたらよう、お前、イリシエンでも屈指の山賊じゃねえかア」

「うん？か怖いなら帰ってもいいんだぞ？」

「おいおい、勘弁してくれよう。あそこの頭には散々コケにされたんだア。頭は俺が斬るぜエ」

「ああ、いいだろう。その前に作戦会議、だがな」

カイゼルは馬鹿じゃない。

酔って落とし穴には嵌まるが、戦時の勘は鋭く、判断も速く正確である。

なにより、その剣、槍、弓、その他あらゆる武術の才能が桁外れだ。元々は騎士の出自らしいが、それが何故たかだか13歳の悪ガキに従っているのか、俺にはよく分かっていない。

「確かに俺は強いさア。まあ、お前さん程じゃなかった…それだけの話さア。」

魔法を使えば勝てると思うが、剣と剣で打ち合っても、まだ勝てない。

彼は俺の、いや、一賊全体の武の師範とも言える存在なのだ。

数分後、複数の足音が幹部達の到着を告げた。

第2話（後書き）

11 / 22

幹部を収集して↓幹部をよんで
性質状↓性質上

まず国語の勉強かな、うん

うにに、ヒロイン出てこない…
てかここまで女の子0人…むさい

第3話

そして時は流れ、ルイシェン18歳の秋を迎える。

王が死んだ。

今回の王は先王よりもさらに愚鈍な、まだ子供の王、ケーフン。

「鶏糞は傀儡だ」

「鶏糞じゃなくケーフンなんだけど、似たようなもんか」

鶏糞だろうがケーフンだろうが関係ない。

問題は傀儡だつてことだ。

つまり先王の時代に金で得た宰相の位を持つ屑の娘と先王との間に生まれた子、それがケーフン。

宰相とその一族が政権の全てを握った事になる。

この時、ルイシェンの一賊は半年で約5倍の餓狼旅団を傘下に収め、その勢力は留まることを知らず巨大だった。

黒地に獅子を描いた旗を掲げた一賊は”黒獅子旅団”と呼ばれていた。

本拠地は北の大山脈の麓にあり、すでに一つの街となっている。事態を重く見た国は軍を派遣してきたが、禄に訓練もしていない兵に勝ち目はなく、忠誠心の薄い兵は黒獅子旅団に吸収される始末だった。

「おや、あの馬車は…ルイ、君の家の家紋だね。お父上かな？」

「ルイシェン！早く、賊を解散して家に帰ってこい！先王の代ではよくして頂けていたが、このままでは我が家は潰されてしまうのだぞ！」

そんな事だろうと思った。

今、ヨジェワール家は一族存亡の危機にまできている。原因は無論、この俺にある。

「父よ。既にして我が家はヨジェワール家に在らず、此処黒獅子旅団にある」

「ルイシェン…お前が大義を抱いていることは知っている。だが、この賊でどう今の世を正そうと言うのだ！？

王を誅殺し、お前が王になるとでも！？

そんなことでは民は誰一人として納得しない！！

あのような愚王でも、王家の威光は確かにあるのだ！！」

「俺なら、ユアンを王に立たせる。あれは聡明で、民を重んじる」

ユアン 16歳

父の妹と先王との間の子である。

ちなみに父の妹はすでにケーフンの母に毒殺されている。

「だが、ユアン王子は…どこかに幽閉されていると聞くぞ」

「大体の目処は付いてる。発見、保護した後はユアン殿下こそ王位を継承すべきと主張し、軍を挙げ、中央王都に進軍すべきだ」

「その前に宰相一族に北部領を取られてしまうぞ…」

「断固抵抗しろ。ここが正念場だ、父上。

ここを耐えきれば我が国はガラリと変わる。

無能は城から消え去り、真に忠誠心があり、才ある者が官職を得る、自然な形の国に…」

そのためにも、この賊、いや軍は絶対不可欠であろつ。

鶏糞なんぞは畑の肥料にするしか使い道はない」

確かに黒獅子旅団は強い。

国の正規軍などまるで相手にならない程である。

だから、ゼラードは賭けてみることにした。

親不孝で飛びっきりの不良の、しかし、たった一人の愛する息子に。

第3話（後書き）

ううん、ねむいてんかいはやい

第4話

北部を我が領に” 鷄糞一族 ”

幽閉された王子を探す会” 黒獅子旅団 ”

「まだ北部はどうにかならんのか？」

「宰相閣下、北部の領主は頑なに動こうとしません。
また、領民にも慕われており…っ！」

どべし！

鉄扇を振るわれた軍隊長が膝を折る。

「そんな事は聞いとらん！

王の勅命を無視する貴族なんぞに価値は皆無だ！領主の屋敷ごと焼き払え！」

「はっ！」

兵の宿舎に戻った軍隊長は、5万の兵を引き連れて北部に進撃。中央領と北部領の境にある村にて、ついに、ケーフン王を掲げる正規王国軍とユアン王子を掲げようとする正規王国軍から離叛した北部軍との戦端が開かれる事となるだろう。

「いいか！相手はここ何十年も祿に仕事もしてねえ雑魚ツペ野郎共だ！

俺達、北部の厳しさと共に生きてきた精強たる軍に適うハズがねえ！軽く捻り潰してやろうぜえ！！！」

うおおおおおお！！！！

楽勝だぜえええ！！

奴らの装備丸ごと剥いでやんよ！！！！

団長ー！抱かせてくれー！！

よし、気迫は十分だ。

最後に可笑しな声が聞こえたが気のせいだと信じたい。

正規軍は5万か。

対する北部軍は1万5千、黒獅子旅団を含めると2万3千といったところか…。

村は敢えて素通りさせ、その次の砦で迎え打つのが最上だな。

砦なら防戦の俺達に圧倒的に有利に戦えるだろう。

しかし境界の村は…正規軍に略奪行為をされる事になるだろうが。

「カイゼル、軍を率いて砦に迎え！」

ジェイク、ジェガンはカイゼルの補佐だ！

ライズ、それとリリーとセルフィは俺と引き続き王子搜索だ」

「了解したぜ、大将オ！」

野郎共！！行くぜエ！！」

うおおおおお！！！！

しかし暑苦しく奴らだ。

魔導隊の連中は付いていけてるのだろうか

心配になってくる。

黒獅子旅団は現時点で約8000人規模にまで膨れ上がっていた。
そこまで、この国は落ちぶれてしまっただけという事なのだろう。

旅団の内にも役割があり、各自に合った兵役をしている。

まず主力の4000の歩兵隊と2000の騎兵隊

それに遠距離からの1500の弩弓隊

僅かばかりだが魔導の才を持つ150の魔導隊

そして魔導隊よりもごく少数だが空を飛ぶワイバーンを駆る50の
竜騎隊

それぞれに隊長、副隊長を付け、指揮させている。

カイゼルは隊長、副隊長に指令を飛ばす軍隊長である。

旅団の連中には將軍などと呼ばれているようだ。

「よし、行くぞ。俺達がユアン殿下を探し出さなければこの戦は終わらない」

大義名分を得なければ、こちらからは攻め入ることすら適わないのだ。

「しかし、あらかた匂うところは探し尽くしてしまったじゃないか。実は皇后共々毒殺された後だっりして」

ライズが囁く。

まだ一カ所、匂う場所が残っている。

不浄の森、幽閉された王子。

そんな噂話だが…。

「ライズ、ユアン殿下が即位なされたら今の言葉を伝えておくわ」

そんな事を言うのは姉御肌なリリーだ。

長い赤髪に切れ長な赤い瞳を流してライズの耳元で囁く。

真つ赤な顔で反論しだしたライズを見て、からからと、紺色の眼を細めて、少女のように笑うのはセルフィ。

水色の長髪を背中の当たりで縛っている。

「お前ら、遊びに行くんじゃないんだぞ」

と俺が諫めてもセルフィが間の抜けた声で、はい、と返事をするだけだった。

メンバーを間違ったか、俺。

第4話（後書き）

11/22

からから匂う↓あらかた匂う

あから？（笑）

あああ、白衣の天使が書きたい。
でももうちょい我慢。
でも設定があるので紹介だけ

と、いうことで今更ながらキャラクター紹介をば

ルイシエン＝ヨジエワール（18）

本作の主人公

イリシエンで最も位の高い公爵家の血筋を継ぐも賊の頭目になる。
金髪碧眼で女の子っぽい童顔を本人は気にしている
絵本に出てくる王子様の様な顔して悪党

サクラ＝サカモト（16）

日本人、坂本 桜

今時珍しい黒髪の和風美人

ルイシエンの世界では黒髪は希少

実家の手伝いと称して看護婦さんの服を着て患者さんの心を癒やしているらしい

性格破綻者ではあるが魔法的にテンプレ通りの能力を持つ

第5話（前書き）

ここまでプロローグでした。

えっ！？

つまり女の子が出て来ないと物語は始まらないのですー！

第5話

捕らわれの王子
追われ者の黒獅子

不浄の森

その名の通り不浄な障気が森一面に漂っている。

この障気の中では教会の伝える聖なる精霊のお導き、所謂精霊魔法は使えない。

「まあ普通に自力で魔力練って放つ魔法は使えるんだがな」

精霊と同じく、人間でも気合いと根性で魔力を練れるというのが俺の持論である。

「あう、そんなの使えるのルイ様だけですよう。セルはこんなところじゃ無能もいいところですよう」

「あらあら、セルフイから精霊魔法を取っても”愛嬌”が残るわよ？」

「いや、せめて剣術とか残せよ」

うん、やはり、この三人は退屈しない。
共に旅をする仲間としては最適であろう。

「それよりもライズ、思い出さないか？」

「ああ、丁度、俺もそう言おうと思ってたんだ。いやあ若かったなあ……あの頃は」

そう、俺とライズは以前二人でこの森に入った事があった。

「あの頃はよ、お前の事、女だと騙されてたよ」

俺は騙してない。

こいつが勝手に勘違いしてただけだ。
それに気付いてて面白そうだから黙ってたのが騙してると言われればそれまでだが。

「えー！ルイ様とライ君の二人で！？」

そこで二人の愛情は芽生えたのっ！そうに違いないです！」

この女は黙ってれば妖精ように可憐なのに、脳内は腐っているのだ。

「それじゃあ、今回は私とセルフイの愛が芽生える番ね」

そしてこの女は遊廓の女共の数倍は艶やかで美しいのに、こんなだし。

「……セ、セルはそっちの趣味はないですっ。

それよりルイ様とライ君の馴れ初めが聞きたいなっ」

必死に話題を逸らすセルフイだった。

ま、たまには昔を振り返ってみるのもいいだろ。
今まで散々、未来しか見つめずに生き急いできたのだから。

ルイシエン＝ヨジェワール
7歳の春

「ルイーちゃん、あーそーぼー」

ライズ＝アツサム 8歳

「きみ、しつこいのですよ。おれは父上の本をよんで、勉強してるのですよ」

「ルイちゃん、なんで女の子なのにおれ、なの？
勉強なんかより、体うごかしたほうが楽しいよ！今日は不浄の森をたんけんしよ！」

そう言われてルイシエンはピクリと反応する。
不浄の森

精霊の立ち入れない程の障気を放ち続けていると、父の本に書いてあったのだ。

「そんなところ入ったらいかんのですよ。教会にばれたらお説教、ですよ」

「ルイちゃんは真面目だなあ。バレなければいいんだよ！こっそり行って、こっそり帰ってくる。これでいいんでしょ？」

ライズが不真面目、というかやんちゃすぎるだけなのだが、好奇心旺盛なルイシェンは行ってみたいと思い始めていた。

「ホントに仕方がない奴なのですね。でもバレた時はライ君にむりやり連れてかれたって言いますからね」

「そつこなくっちゃ！」

途端に目を輝かすライズ。

子供は実に単純明確なものである。

不浄の森

「うつ、けっこう、ふんいき、あるね」

「怖いんですか？なら帰ってもいいのですよ……」
役立たずめ（ボソッ

「いや、いやいやいやいや、こんくらい全然怖くないよ！兄上からパクってきた剣もあるんだ！さあ行こうか！」

2時間後…

「ルイちゃ、ここどこ？」

「知りません」

迷子だった。

更に2時間後

「ひっく、ひっく、ばば、ママ…」

「うるさいですよ。まっすぐ歩いてれば外に出られるはずですよ」

泣いていた。

更に2時間後

「うっ、う、ひっく、ルイちゃ、もうまっくらだよ。ぼくたち、ここ에선じゃうのかな？」

「一人で死ぬといいのですよ。おれにはまだやることがあるのです。こんなところで死ぬはずがないのですよ」

詰んでいた

それから三日後の夜

「ルイちゃん、おなかすいた」

「自分の足でも焼いて食べればいいのですよ」

「それじゃあ、歩けないよ」

そんな事を言いながらフラフラと歩く少年二人。

ガサガサ ザワザワ

「っ！な、なんかいるよルイちゃん」

「魔獣でしょうか？」

「グガオオオオオ！！」

冒険者ギルド

Eランク指定モンスター

ルーグルⅡラビットが現れた！！

草食系モンスター

凶暴性は皆無で非常に温厚な性格だが、逃げ足だけは速い。その肉はとろけるような柔らかさと独特の香りがして美味。また愛らしい姿をしているので愛玩動物として飼育されていることもある。

「嘘だ、嘘だ嘘だ嘘だ嘘だっ！！！！
こんなのがルーグル＝ラビットなんて、こんなの絶対おかしいよ
おおああああ！！！！」

第5話（後書き）

11/22

なんで女の子なのおれ↓なんで女の子なのにおれ

恥ずかしい…

。。*。*。*。*

仕事の合間にちまちま更新しますた。

次でいよいよヒロイン登場です。

きっと愕然とします。悪い意味で。

ライズⅡアツサム

19歳

ひよろりとした長身だが筋肉は付いている。

茶髪に薄桃色の眼

なんかかわいいね

ルイシェンの幼なじみで過去を知る人物、という点に置いて一目置かれている。

ルイシェン目当ての女性団員や男性団員（？）によく質問されている光景を見る。

纏う雰囲気がかつぽいけど意外と頭がいいのはルイシェンに軍略を叩き込まれたから。

主に槍を使って戦う、歩兵隊の総長。

カイゼルⅡサードレンシア

33歳

南東の没落貴族の出身。

そのため、南東訛りがひどい。

黒獅子旅団の兄貴分的存在で、武術の師範、そして軍隊の総司令官。余りにも彼に権力が集中したため、実質的なリーダーは彼なのではないか？という声も多く挙がっているが、彼はこう言う。

ルイシェンは黒獅子旅団という国の国王である、自分は聖騎士にして將軍なのだ、と。

聖騎士、王に忠誠を尽くし守る

將軍、王に仇なす敵の悉くを滅ぼす

確かに自分は全ての軍隊を動かすことを許されているが、それは黒獅子旅団の象徴、団長ルイシェンの意志を代行しているだけだ、と。

そもそも黒獅子旅団というのは既に一つ一つの街になっており、それなりに発展している。

領主たる団長の仕事の殆どは内政になってしまっているのだ。

第6話

ちびっこ死神は今日も首を狩る
馬鹿は死んでも治らない

そだ！うそだ！うそだ！
こんなの絶対おかしいよおおああああ！！！！

少女はその奇声を聞いて目を覚ます。
黒い毛皮を纏った少女の身のこなしは、正に獣そのものだった。

「……うるさいなあ、安眠妨害は首ちょんぱの刑つての、この森の常識なのになあ」

なにやら物騒な事を呟きながら右手に魔力を注ぎ込む。
そして顕現したるは少女の背よりも長い、まるで刀のような刺身包丁。

「さて、今日も今日とて、首狩りごっこの始まりだあゝ！」
どこか壊れてしまったような陽気な声と目で、森を獣の様に木から木へと飛び移って目的地（処刑場）へと向かって行く。

「ルーグル!!ラビット、お前のなきごえはグガオオオ!!じゃなくで、きゅうん、だろぅが!!!」

そう言って兄から借りてきたというショートソードで斬りつける。

「わぁ、どうしたのです?いきなりやる気まんまんなのですね」

「ぼくはわすれはしない!ルイちゃんと二人でそうげんでルーグル!!ラビットをぐうぜん見つけ、ひっしにつかまえて、二人でかわいがったあの日のことを!!!ルイちゃんもルーグル!!ラビットもかわいかったんだあああ!!!」

これは重傷だ。

もうだめかも。

完全に暴走中なのですね。

しかしライズの全力の一撃も巨大ルーグル!!ラビットが軽く身を動かしただけで見事に受け流される。

そしてくるんと回転、尻尾叩きつけ!

「グヘッ!ウフワアアア!!!」

直撃。

軽く10メートル以上吹っ飛ばされて大きな木に激突。

「ライ君ー！」

急ぎ駆けつけるも、その姿を見ると絶望的になってくる。

頭は辛うじて無事だったが、胴体部分はまるで爆発したかのように色々とごちゃごちゃになっていた。

「ライ君、死んだら駄目、なのですよ。ライ君が死んだら、釣りも戦盤も駆けっこも、チャンバラも出来なくなってしまうのですよ……！」

「…それ、ぜんぶ、ぼく、まけたよね…ぐふっ」

「ライ君ー！ライ君ー！」

「げほっ、げほっ、ふ、うれし、いな。こんなぼくなんかの、ために、ルイちゃ、がないて…」

ルイちゃ、さいごに、つたえたい、こと…ごほっごほっ」

「ライ君…うつ、ひつく、なにです？うつ、らいくん」

「…だ、い、す、き……」

「ら、ライ君ー……！！」

おれもね、きみに伝えなきゃいけないことが、あるのですよ……！
おれ……じつは……

男、なんだ……」

沈默

その沈黙は今までの何よりも重く、ルイシェンにのしかかる。死人は喋らない。そんなこと、聡いルイシェンには分かっていたことだったのに、涙が止まらない。

「……えっ、おとーじ?」

「えっ?」

「……いや、えっ？おとこ？」

「えっ？ うん、おれ、男だよ？」

「アツ――――！！！！！」

ライズIIアッサム

この日8歳の春が終わりを告げた。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

だが、そんなこと（笑）は関係なしに物語は進んでいく。
来るべきエンディングに向かってー

「やあやあ、空気を読まずに失礼するよ。
ついさっきの話なんだけど、

こんなのぜったいおかしいよおおああああ！！！！
とか言ってた近所迷惑、睡眠妨害な屑はどっちかな？
こっちの聡明そうな可愛らしいお嬢さんかな？

それとも、こっちの少しアホっぽいお坊ちゃんかな？
うん、君だね。既にして死にかけてるけど、間違いなく。でも一人
残すのも失礼だし…仲良く一緒に逝きたいよね？うんうん！そうだ
よね！そうに決まってる！じゃ、そゆわけでー

……サヨナラ」

言い終わるや放たれる濃密にして圧倒的な殺気。

当然の事ながら戦場にも出向いた事のない少年二人が、これほどの
殺気を自分に向けて放たれるのは始めての経験だ。

まさに背筋が凍って何も、口を挟む事さえ、出来ない。

だが……

「グガオオオオオ！！！」

まさに死神の鎌が首を浚おうとした、その瞬間だ。

自分の獲物を横撮りされそうになっていることに気付いたルーグル
「ラビットが吠えたのだ！

「…う、る、さ、い」

一閃

ゴロリところがるのは愛嬌などどこかに忘れてきてしまった狂兎の首。

「はあ、なんかもう、お腹すいた。
今日は兎の丸焼きね。」

じゃ、ばいばい。早く帰るんだよ、わたしの気が変わらない内に、
ね。

アハハハ、今日から兎には感謝して生きなきゃ、だね？アハハハ……」

た、助かった、のか……

生きた、心地がしなかった。

「あの、ぼくも、うさぎのまるやき、食べたいな」

「「えっ？」」

「……えっ？」

第6話（後書き）

あああ、狂ってるもうキャラが全体的に狂ってる

リリースレンダーヘヴンアークスⅡレムレム
年齢不詳

名前が圧倒的に長い。世界一名前（性ではなく）の長いギネスに挑戦すべき人物。略してリリー。だれにも本名を覚えて貰えない悲しき定め。作者すら覚えてない。

謎の多い団員だが団長からの信頼は厚く、獅子旅団の暗部こと諜報部隊の隊長を勤める。

使用武器は短剣、ショートソードなどを金属製の紐、所謂ワイヤーで繋いだものを使う。

攻撃範囲が広く、かなり変則的でも使い手が彼女とあつては攻略は不可能とも言われている。

だが魔法には弱く、焼いて熱伝導、感電させる、という手も使える。異様に器用な彼女はその位の対策はしていそうなのだが。

三度の飯より可愛い女の子が好きという人。

その美貌は遊廓の女共も裸足で逃げ出すとかなんとか。

ポーカーフェイスで表情から感情の変化が全く読み取れない。

賭博では団長ルイシェンを除くとほぼ最強。

現在はセルフイを狙っているらしい。

セルフイⅡハートーツン

16歳

若手女性団員として現在人気絶好調のアイドル的存在。

だがその脳内はアツい事になっているのはあまり知られてはいない。夢を見ていましょう。その間は幸せです。

精霊魔法の使い手で水の精霊、風の精霊と契約を交わしている。

また、弓も多少使えるらしい上により料理上手でもある。（弓と料理になんの関連性が！？）

第7話

崩壊する自身の世界

そして物語は失速する

「ふふふ、流石ライ君ですねっ」

「くっくっ、違いはないね！。

…ん？てゆーか、腹の傷はどうなったのかな？」

腹の傷はどうなったんだ？

はは…それは、俺のトラウマだから止めて下さい。

なんかルイが男だっけ暴露してから痛みとかどうでもよくなってるんだけど、やっぱり死にかけてたのは間違いなかったんだよなあ。

あの治療…？だけは二度と体験したくない。ああ腹痛くなってきた。

「森の死神か…。まだいると思ってるかい？」

リリーが言う。

リリーの名前って長すぎるから誰も覚えてないんだよな。

「ああ、あの少女は…自分の生き方を簡単には変えられない、そん

な人間だった」

「そんな、森を出て街へ行けば、もっと人間らしい生活が出来るのでは…」

ところが、駄目なんだ。

あの子は、とても今の世では生きていけやしない。

教会の教えー黒は破滅の象徴である

そんな下らない教義が、あの子を狂わせてしまったんだろう。

「まあ、適当に座つてよ」

「あ、うん、ありがとう」

「ありがとうなのですよ」

ぼくの空気が読めない発言が上手く行ったのだろうか。

連れてこられたのは、意外なほど、しっかりとした作りの木造の家だった

生活の匂いがほんの僅かだが漂っているのが分かる。

因みにお腹の怪我は、結果的に言つと、この女の子に治してもらった。

この治療はトラウマものなので、あまり話したくない。

「ええと…あなたはここでくらしているのですね」

「ええ、あー、私のことはサクラでいいよ、”白衣の天使”サカモト、サクラ…いやー、貴方達流な言うならばサクラ＝サカモト、ね！」

サクラ、ちゃん変わった名前だなあ。

黒髪黒眼、黒は破滅の象徴って司祭さまが言ってたのを思い出した。この子は黒髪わ膝辺りまで伸ばしている。司祭さまに言わせたら、まさに破滅そのものなんじゃないか、と思った。白衣の天使というのがよくわからない。

「サクちゃんは、一人なの？家族は？」

あう、隣のルイちゃ…ルイ君に睨まれる。

サクラは一瞬、顔を強ばらせたが、

「きつと、もう二度と会えない」

と言った。

「そつかあ…じゃあさ！ぼくたちが家族になってあげる！サクちゃんは、何歳？」

「16さ…いや、数えてないから、分からない。まあ、この森で生きてくのに年齢なんか関係ないしね？」

自分の年も数えてないの！？

「おれの、1こ下か、2こ下くらい、じゃないかな？たぶん」

「じゃあー、えーと、6さいか、5さい？」

少なくとも、年上には絶対に見えないので間違っではないのではないかな。

「じゃあ、5歳ってことにしよう！女の子は若い方がいいからね。ところで、お嬢さんとお坊ちゃんの名前は？」

はっ、ぼくとしたことが自己紹介を忘れていた！
隣を見ると、ルイ君もしまった、という顔をしていた。

「ぼくはライズ・アッサムって言うんだ。
つい、こないだ8さいになったばかりだよ。」

誕生日、ルイ君は手のひらサイズの、なんだか不思議な物体をくれたんだ！
うにうにしていって、触ってみると弾力性があって…半透明で…不思議な物体。

因みにその時の言葉は

えっ誕生日なのですか？へー良かったんですね。あ、ちょうど失敗作が一杯あるから、良かったら持ってくださいねです。

である。

「おれはルイシェン」ヨジエワールというですよ。

あと、おじょうさんはやめてくれです。おれは、男なのですよ」

はっ、そうだ、ルイ君は男の子。

あああ、ぼくはこれから何を糧に生きて行けばいいのだろう…。

「えっ？男の子なの？へー、ほほー、ふむ。

キミ、あんまりにま可愛らしいから女の子だと思ったよ。

喋り方もチョー可愛いし、私も真似してみますよ！」

「しゃべり方もちょーかわいい…？普通のけいごしゃべってるだけなのですよ」

敬語なんてルイ君にはまだ早いんじゃないかなと思うた。

「アハハ、ですよとか、付ければ敬語になるって思ってるの。

敬語なんて使う必要ないんだよ。敬語は尊敬する人と話す時だけいいよ」

「へー、そうだったのか。じゃあライ君なんか、けいごで話してたなんて悔しい」

えっ？それってどういう意味？

「うん、全くその通りね。あ！肉焼けたー！」

美味しそうな匂いが漂ってくる。

三日間、なにも食べていなかったのもう空腹で死にそうだった。

「はい。この兎のおかげで、貴方達の首が繋がってるんだよ。感謝

して食べるといいかもね！アハハ―」

その冗談は笑えないと思うんだ。
でも感謝します。

ルイ君はここにきてから、ずっと同じ目をしていた。
知りたい、という目だ。

分からない事があるのは、許せないんだとか聞いたことがある。

「この、ルーグル＝ラビットはなんでこんな大きいんだ？
きつとこの霧のような障気の影響だ。

じゃあ障気の正体は？

教会の伝え通り、呪われた地だと？

バカバカしい。

もしかして魔力？

どこから大量の魔力が？

なんで精霊が入ってこないんだ？」

なんかブツブツ言ってる。

こういう時のルイ君は、何を言っても無駄なんだ。

「アハハ、キミ、将来は学者さんだね？

想像通り、この霧は魔力だよ。

じゃあヒント！

昔、強い魔女がこの森へやってきた。

その時は至って普通の森だった…みたいなの？」

「はっ、この森を包む魔力は、その魔女の魔力だということなのか
？」

「その通り〜！」

魔女は不老不死の研究をしていて、行き着いたんのが、この霧。自分の意識を全魔力に抑えこみ、霧に変えたの。もちろん、肉体は死んでしまったのだけれどね？」

ううん、よくわかんないけど、ルーグルⅡラビットの肉はとても美味しい！

柔らかな食感、程よい脂…味は同じみたいだよ！ルイ君ー！

「と、いうことは、この霧は、生きていると？
この霧、全体に一つの意味があるということ？

そもそも、それを知る貴女は何者なんだ？」

第7話（後書き）

11 / 22

トラウマから↓トラウマだから

中途半端だけど眠い…

ぶっちゃけ見直しちゃんとしてないので、誤字脱字が大量にあります。すでに自分で幾つかは直したけど…

発見してしまったらコッソリ教えてくださいな（＜|＞）
では

第8話

白衣の天使は死神で

未知は未知として理解する

「何者と聞かれれば、こう答えるしかないね！

うん、白衣の天使、と！」

：

黒獣の毛皮を纏い

振るう剣は無慈悲に首を狩る

彼女はまさに死神だった。

今、この瞬間にでも彼女はルイシェン達を容易く殺すことが出来る
だろう。

命を他人に握られている事への恐怖。

未知なるものへの強い欲求。

それがルイシェンの思考を鈍くした。

「こっちは真面目に聞いてるんだ！」

ピキ

空気が割れた音を聞いた気がする。

ひやりと首に冷たい感覚。

「ご飯は楽しく食べるものだよ？ いったただつきまーす！」

「…すまん、ですよ」

隣を見やると幸せそうに兎の肉を頬張る友の姿。

なんて脳天気なんだろう、二度も死にかけた人間の姿とは思えない。大物だ。

「別に、敬語を使う必要はないんだよー。」

ただ、うるさいのは大嫌いなんだよね！ ついつい首を跳ね飛ばしたくなる。 そう思わない？ 思うよね！ じゃあ…黙れよ」

黙って兎肉を食うことにした。

「ふう、ごちそうさまでした〜っと」

？

ライ君と二人で不思議そうな顔をしていると、サクラが説明してくれた。

食事の前には「いただきます」

食事の後には「ごちそうさまでした」

と手を合わせて言うのが彼女の故郷の習慣らしい。

食糧に感謝を込めて、また料理を作ってくれた方へ感謝を込めて…

という意味らしい。

「「ごちそうさま、でした？」」

「うんうん、かわいいねー！やっぱり子供は癒されるね！いやほんと」

なら、殺そうとしないで頂きたいものである。

「ね、ね、サクちゃん、あの剣見せて！」

おお、勇気ある自殺志願者が一人。

だけどあの、いきなり現れていきなり消える不思議な剣を見てみたというのは俺も同じで。

ライ君が首を跳ねられるにしても剣は見えるので黙っておくことにする。

「あの剣？…ああー！これね！」

右手を凝視する。

手のひらに光が集まり、一瞬にして剣が形成される。

見た感じ、全くブレがない。

いや、実際に首に当てられたのだから分かる。あれは現実の冷たい刃物そのものだった。

以前、屋敷にきた魔導士に見せてもらった魔法剣というものは、もつとばやばやしていて剣の形をした何か、といった感じだった。

「これは剣じゃないよー。包丁なんだよ。

我がサカモト家の家宝”首狩り包丁”…のレプリカ」

なんて物騒な包丁なんだろう。

それを家宝にするサカモト家ってどんな家なんだ。しかも偽物かよ。形は確かに包丁のような感じた。

片方しか刃がなく、鍰もないし柄も木製である。

だがこの長さは異様だ。これで野菜を切っている姿が微塵も想像出来ない。まだ首を狩っている姿の方が想像しやすいというものだろう。

この波打つ模様は何か、と尋ねると、知らないよ。と残念な返答が帰ってきた。

「これは、魔法剣、なのか？」

「残念！正しくは魔法包丁だね！私が一人で寂しがっている時にね、魔力に、家族の温もりが欲しいと、強い想いをのせてみたらこれになったの」

無茶苦茶な話だ。

そもそも首狩り包丁から家族の温もりを感じ取ることなど出来やしない。

「この柄には母さんの温もりが、この刃には父さんの温もりが、いっぱいに詰まっているんだよー！」

父さん！父さんー！？

父さん斬られたの！？

しかも母さんに！？なんてトラウマだ。

そんな事があったのでは、この子が狂ってしまうのも無理はないだろう。

「へえ、魔法で剣、ううん包丁を作れるなんて、初めて聞いたよ。他には何か作れるの？」

「そうだな、生き物以外ならなんでもいけちゃうかもね！そもそもこの小屋も私の魔力で出来てる訳だし。アハハ―

よし、お腹膨れて気分もいいし、特別に自慢してあげるねー！」

サクラに促されて小屋の外にでる。

どこからどうみても本物の木で出来たものにしか見えない。

「この小屋から半径1キロ以内は、わたしのテリトリー、つまりわたしの魔力支配域ってわけ。

ん？わかんないかな。

ここから1キロ以内ならドコにでも魔法が放てる、という意味だよ」

そうつって右手を掲げる。

ズドン！

少し、離れた場所に巨大な剣が突き刺さる。

まるで神が地上に裁きを与えたかのような所業だった。

中央王都の、教会の塔より大きい…。

それだけではない。彼女はこの大魔法を何の詠唱もなく、魔法陣を描く事もなく、刹那の隙もなく、そう、まるで、呼吸をするかのような自然さで放ってみせたのだ！

そして、これだけの力を見せておきながら、全く疲労感を感じさせない。

まさに規格外の化け物だった。

第8話（後書き）

11/24

始めて聞いたよ！↓初めて聞いたよ！

……orz

これが、異世界転生のテンプレ的な能力らしいですよ！

第9話

少年と少女は夢見て誓う

「すごい…」

あまりにも衝撃的な力を見て、それしか言葉が見つからなかった。
自分も魔法は使えるのだ。

それも生まれた時から、精霊の力などに頼らずとも、だ。
それ故に、呪われし忌み子などと蔑まれたりもするが俺は全く気に
しなかった。

奴らは嫉妬しているだけだ。生まれつき獅子としての力を持つ、こ
の俺に。

だが、今この馬鹿みたいな魔法を見せられ、自分もまた、奴らと同
じ矮小な存在なのだということを実感させられている。

彼女、サクラⅡサカモトこそが真の獅子だったのだ。

「どうだー！すごい？まいったか。アハハハ」

「この森で障気となって生きる魔女。
それこそがサクラの正体…！？」

「それは違うんだよ、ルイシェン君。

わたしがこの森に来たのは多分、5年くらい前だし。来た時から森の主様は障気としてこの森に居たんだよ。まー連れてこられた当時は赤子だったから、いまいち覚えてないんだけどねー！アハハハ！それにしても、キミの思考回路は子供の割に、怖いくらいに理路整然としているんだね。

キミ、もしかして、わたしと同じ転生者なんじゃないかな？

モシモーシ、ニホンゴワカリマスカー？アハハハー…」

障気の魔女ではない。

転生者、と彼女は言った。

そして俺も、そうではないのか、と。

馬鹿みたいに陽気な口調と、その眼にはほんの、ほんの僅かだが期待が込められているように感じる。

だけど。

「…？」

言っている意味がよく理解できないこの頭が恨めしい。

もう少しで、サクラの秘密を知ることが出来る。そんな気がするのに。

「…アハハー

ごめんねっ！気にしないで。

それより、わたし森の外のお話が聞きたいな！

わたしは生まれてからすぐ、この森にゴミみたいに捨てられちゃったからさ、この世界のことよく知らないんだよね。

森の主様は生きた時代が違うし、魔法の事しか話してくれないしー。ねえ、キミはどんな世界を見てきたのかな？

身なりがいいし、華やかな貴族の世界かな？」

森の主様とやらは、俺にも会話できるのだろうか。

もし、サクラのあの途轍もない魔法…それが主様から教わったものならば俺にも…。

いや、それは今はいい。

今はただ、サクラの望み通り俺の事を話してみよう。

その後、転生者だという、彼女の話が聞けたらいいな、と思った。

思えば、俺は生まれた時から、この世界を恨んでいる。

ただ精霊に頼らずとも、自立して魔法が使える。ただそれだけで呪われた子だなどと後ろ指を指される世界。

それだけなら俺は気にしない。

だが、そのせいで俺の母は気を病んでしまった。

自分の腹から呪われた子が生まれたと言われれば、誰だって気を病んでしまうだろう。

母を苦しめているのは他でもない、この俺である。

ならば救うのも、俺だ！

精霊宗教など、実体は王族、貴族の金儲けに過ぎないことを俺は知

っている。

イリシエン王国の初代国王は何体もの精霊と契約を結んだ精霊王だったという。

そこから精霊と契約を結ぶ秘技は王家に伝承され貴族に渡り、その貴族が宗教を興した。

精霊宗教の現在の教皇は王の弟で、そいつの息がかかった貴族達が幹部になっている。

幹部は教会にて魔導の才ある者を選別し、神に選ばれた子だ、なんだと言って精霊と契約させる。

そして精霊魔法が使えるようになれば民衆は神の奇跡だと少くない金を落としていく。

教会など燃やしてしまうかと、なんと思ったことが分からない。だがそれをしてしまうと、いくら現王妃の実家であろうと、ヨージェワール家は爵位を剥奪され、母の病は間違いなく悪化してしまう。

父はただ、元気な姿を見せてやればいいと言うが時一刻と弱ってゆく母を見てそんな悠長なことが出来るはずがない。

とはいえ俺が使える魔法といえば、指の先から小さな火を出したり、グラスの中の水を凍らせたりと役に立たないものばかりだ。

そもそも母の前で呪われた力なんて使えるはずもなく、父に買ってもらった医術の本を読み漁る毎日を送っていた。

サクラは話している間、相槌を打つだけで、特に口を挟んではこなかった。

ライ君はあの巨大な剣《神の裁き》を見に行っている。
また兎に狙われなければいいのだけど。

「うん、キミ…ええと、ルイシェン君、だっけ」

「ルイでいいよ。家族とライズはみんなそう呼ぶから」

家族とライズ以外は、呪われた子やら悪魔としか呼ばない。

「そう、ルイ君。キミはわたしと似ているね。」

わたしも、生まれた時から魔法が使えたんだよ。それに、この黒髪黒眼が最高に不吉なんだってね！アハハハ…

キミに魔法を教えてあげる。

お母さんが、元気になる魔法。

それはね…

生まれきて、幸せだ

そう言っただげること、なんだよ。

お母さんは、キミの事が心配で心配で、気を患ってしまったんだね。
私が産んでしまったばかりに、この子は、教会や周りの人間に呪われた子だなんて言われて、なんといったらいいのか…

そう思い詰めて、思い詰めすぎて、気を患ってしまったんだよ。

だから、教えてあげなきゃいけない。

わたしは幸せです。

お母さん、産んでくれて、ありがと…っ…っ…

…
いつの間にか、自分が泣いている事に気付いた。
サクラも泣いている。

俺より、余程つらい境遇のサクラだが、確かに似ているのかもしれない。

これも魔法、なのだろうか。

どれだけ虐められても涙一つ見せなかった俺でも、この涙を止めることなどできやしない。

「わたし、前世ではね、小さな精神病院で白衣を着て、キミのお母さんみたいな人たちとお喋りしてたんだよ。

少しでもみんなが元気になるように、と思って、わたしは自分のことを”白衣の天使”だなんて自称してたんだよ。

きつと、この国にはキミやわたし、その両親みたいに、気を病んでしまっている人たちが、まだまだ居るんだろうね…。

ねえ、その人たちを救ってあげるには、どうしたらいいのかな？」

「サクラが、さっきみたいな魔法を使ってあげればいい」

「わたしじゃ、だめだよ。

この黒髪、黒眼じゃあ、この国の人たちは白衣の天使には見えないよ」

なら…

「なら俺が、俺がこの国を変えてみせる。

サクラが堂々と都をあるけるような国にしてみせる。

そしたらサクラはまた白衣の天使に戻る。そしてサクラならきつ

と、沢山の人を救える」

これは誓いだ。

今は”森の死神”であるサクラ＝サカモトとの誓い。

いつの日かきつと

彼女を”白衣の天使”に変えてみせる。

第9話（後書き）

アハハハ―

まず自分の精神を治療してほしいですね。

首狩り首狩り！

サクラの前世エピソードはまた別の機会に紹介します！

第10話

戦争の音色と殺戮
そして再会

イリシエン王国・ヨジェワール領

ゝワールス砦ゝ

ガツキイイン

ザシュツ

バシツバシツ

剣が響き合う音

槍が肉を貫く音

弓の弦を弾く音

戦場は音で溢れている。

遅れるなああ！

助けてくれえ！

敵を焼き尽くせ！

小隊長の怒鳴り声
兵卒達の叫び声
精霊魔導士の詠唱

「いいかア！これより騎兵隊、歩兵隊は皆より打って出るぞオ！
弩弓隊、魔導隊は皆上より攻撃を継続しろ！
突撃イ！！！」

黒獅子旅団、軍司令官カイゼルの号令が戦局を塗り替える。
国を相手に寡兵で戦うことを想定して訓練された兵達は一人一人が、
正規の軍より圧倒的に強く、連携も見事に取れている。
司令官自ら前線で槍と剣を振るい、兵の志気は絶頂だといえる。

「歩兵隊は騎兵隊が狩り残した敵を残らず殺せエ！！
騎兵隊の目標は敵軍隊長にあり！敵陣を一気に貫くぞオ！我に続け
エ！！！」

帝国暦1895年
後世に残された黒獅子旅団の最も古い叛乱は北部領、黒獅子連合の
圧勝に終わった。

北部軍と王国軍の第一戦に決着が着いた、その一週間前

「不浄の森」

「森の死神…ね。

黒髪、黒眼、圧倒的な魔力。

聞いたことはあったけど、実在していたとは、びっくりだねこれは」

昼も薄暗く不気味な雰囲気漂う、不浄の森を歩く四人組
黒獅子旅団、団長のルイシェン「ヨジエワ
ルを筆頭に強者揃いのメンバーだ。

ルイシェンは不浄の森などおかまいなく魔法を使い、その剣筋は速く鋭い。

ライズの槍は、過去に苦渋を飲まれた大兎の心臓を何度か貫いているし、リリーのワイヤーを通した短剣、その変幻自在な攻撃は獣に到底理解できるものではない。

一方、セルフィはなぜか魔獣に懐かれていた。

「ははあ、まさかあの”サクちゃん”の事まで耳に入っているとは、流石は諜報隊長殿つか。

いやあ、こわいこわい。これじゃあ隠し事なんかしたら即弱みを握られてしまいそうだ」

「ふふん、ライズが通ってる遊廓はヴァイスの南三丁目。金髪碧眼の可愛い系ルピシアちゃんがお気に入りだ。」

金髪碧眼のルピシアちゃん…か。

貴様まさか、まだ大将のことが忘れられないのか!？」

ブフウ!!

「いや、いやいやいやいや、ちが、違うぞ!

てかなんでそんな事知ってんだよ!!! いくらなんでも人のプライバシーに入り込みすぎだと思っぞ!

ルイ、そんな蔑んだ目で俺を見るな! だいたいお前が騙してたから悪いんだぞ! そのせいで旅団では俺がそっち系の人間だと認識されちまつてるじゃねえか!

セル! お前まで、そんな哀れんだ目で俺を見るなあああ!!」

「ライ君、素直になった方が楽、ですよ?」

はあ、こいつら腕はいいんだがなあ。

こんな騒がしくしてたら、いつ死神に首を狩られてもおかしくないぞ。

いや、そこら辺は、サクラが多少まともになっていることを祈るしかない、か。

いや、そもそも今回の目的は…。

「お前ら、少し黙れ。そろそろ彼女の魔力制御範囲に入る。

つまりここから先は、彼女の狩り場の可能性が高いんだ。

あんまりうるさくしてると、いつの間にか頭と胴体がサヨウナラってことになる」

「了解」

まあ、言えば素直に従ってくれるのは有り難いことだ。

あれから11年か。

彼女は16歳くらいになっている。

お前は、少しは変わったか？

俺は結局、母を救えたのだろうか。

あの日誓った夢に少しは前進しているのだろうか。

「森の死神」サクラ「サカモトに接触し、ユアン王子が幽閉されている場所に心当たりがないか聞く、それだけだ」

そう、今回の目的はあくまでユアン王子の確保にある。

この世界はまだ、彼女に優しくはない。

誓いが果たせる日はいつになるやら分からないが、ユアン王子さえ発見できれば、間違いなく大きく前進する。

北部は完全にイリシエンから独立宣言をし、ユアンを王として迎え、教会を排斥してたんまり溜め込んだ金を全て民の元へ返還する。

教会の幹部を捕らえて拷問し、王家の秘術、つまり精霊との契約方法を完全に把握する。

その後、新王家直属の精霊魔法支部を建設し、そこで教会の代わりに無償で才能の有無を知ることが出来るシステムを作る。

もちろん、王家と貴族と教会、この三つの関係性を民に知らせた後にだ。

魔法が生まれつき使える子も、髪が黒くても、眼が黒くても、呪わ

れた子なんかじゃない。むしろ祝福された子なんだと、民に説くのは難しいことかもしれないが、やるしかないだろう。

ポトツ

ころころころころ

木の上から、何の気配もなく

降ってきたのは

腐った人間の、生首

「あるう日、森のなか、
ルイ君に、ってね、アハハ」

お久しぶりだね！

あれから何年経ったか数えてないから分かんないけど、その魔力、ルイ君だよな？

槍持ったアホっぽいのはライズ君だよな！どう？当たり前？

女連れとは、なかなかいい度胸してるね。しかも絶世の美女と超絶美少女！

さあさあ、此処に来たからには首を狩られても文句は言えないんだよー。アハハハー！」

以前と変わらず、無邪気に喋り終わった途端、途轍もない殺気を放ってくる死神。

な…に…変わってなさそう！？

第10話（後書き）

11/24

実在していたとは↓実在していたとは

毎回間違えてごめんなさいorz

報告感謝です！

第11話

王子と死神、二つの再会
人はそう簡単には変わらない

身軽に樹の上から降りてきた、底抜けに明るい少女と向かい合うのは、漆黒に身を包んだ四人。

「久しぶり、だな。サクラ」

ルイシエンはそう呟くとニヤツと嗤った。

サクラは戦慄するほど美しい少女へと成長していた。

この森のなかで、どのように身を清めているのかは察することが出来ないが、肌は雪のように白く、その艶やかな長い黒髪は、風を受けてサラサラと揺れている。

「うん、久しぶりだよねー！

ルイ君にライズ君、なんだか大人っぽくなったねえ。わたしは置いていかれてしまった気分なんだよ。

ん？ああ…この首が気になるんだ？

やつら、なんだか大人数で森に入ってきてね、中心部すなわち主さまの屋敷へ向かってたんだ。

まあ、そこまでは割とどうでもよかったんだけどね。アハハ。
わたしの領域に入ってしまったのが運の尽きなんだよ。

そして、キミ達もね？」

ガキイーン！

鎌鼬のような勢いで、ルイシェンの首に迫った剣を払ったのは、ライズの槍だった。

ライズの槍は、普通の槍ではない。

きめ細かく虎の彫刻が彫られた柄は鋼鉄製、そして長い穂先は緋煉金という特殊な金属で造られた逸品なのだ。その重量は6貫（22kg以上）にも及ぶ。

ルイシェンの隣にいたとはいえ、あの神速の速さで迫る首狩り包丁をその重い槍で防いでみせた筋力、判断力、胴体視力は、誰の目から見ても超一流武人の成せる技であった。

「うつひゃあ。参ったなあ。アハハ。

ライズ君、すごいんだよー。

それと自分の首が狩らそうだったのに眉一つ動かさない、ルイ君にもびっくり。

男子三日会わざれば刮目して見よ！ってわけなんだね。

そっちの美女さん二人もただ者じゃないようだし…うん。

ここはいいものを見せてくれたライズ君に免じて、我が家に案内してあげるよ。

既にお客さんというか、居候さんがいるけど気にしなければいいんだよーアハハ」

途端に殺気が収まり、明らかにほっとした表情になる面々。

四人には彼女の剣が、全く見えていなかった。

ライズはほぼ無意識に自分の大将であり希望であり、幼なじみでもあるルイシェンの首を守ったのだ。

そのルイシェンはまず最初に首を狩られるのは多分ライズだろうな、
と思い込み、リリーはサクラの観察に気を取られ、セルフィはあま
りの展開の早さに付いていけていなかったのだった。

「ああ…死ぬところだった。
すまんなライズ、助かった」

小屋に入ると、白い外套に身を包んだユアン王子殿下がいた。

「わああ」

私は思わず、呟いてしまった。

自慢ではないが、我らが黒獅子旅団の諜報隊は優秀である。

団長ルイシェンはなによりも情報を第一に求めるからである。敵対
組織について知らないことがあれば完膚無きまでに調べ、絶対的勝
利を手に入れる。

その優秀な諜報隊員たちがいくら探し回っても見つからなかった人間が、こんなにもあつまり見つかってしまうとは思ってもいなかったのだ。

しかも呑気に寝転がっている上に、視線はなにやら妖しげな本に集中しており、開いた扉へ振り向きもしない。

サクラという少女を先頭に、ぞろぞろと小屋へ入ると、ようやく顔を上げた。

一度だけ水彩画で描かれたこの王子を見たことがあったが、その絵画よりずっと美しい深い碧の瞳を持つ青年だった。

「ユアン殿下、お久しぶりで御座います」

ルイシエンが片膝を付けて頭を下げるのを見て、私達三人も頭を垂れた。

「頭を上げてくれ。ここは城でもなければイリシエン王国の領土ですらない、不浄の森ゆえ、礼を尽くす必要は無い。」

久しぶり、ルイ兄」

言われた通り、遠慮なく頭を上げる。

よく見ると、なんとなくユアンとルイシエンが似ているのが分かる。ユアンの髪は先帝であった父親譲りの銀髪だが、深い碧眼は二人共同じ色をしている。

ユアンとルイシエンは従兄弟である。

先帝とルイシエンの叔母との間に生まれたのユアンだった。

二人は公式に会うことが許されていなかった。

公爵家の長男であり、王族とも縁があるルイシエンが会うことができない理由がある。

呪われたルイシエンを見るだけで、王子に穢れが移るといふのだ。実にくだらない話だ。

それでもユアンは視察と称して北部領にちよくちよく出向いては護衛の騎士を撒いてルイシエンと話していたらしい。

そして、第一王子ユアンは母の死後、行方不明となりケーフンに太子の地位を奪われ王への道は閉ざされたのだった。

「ユアン、この不浄の地においてもその王家の血は眩いばかりに光を放っている」と北部民は知っている。この国を変える革命のために力を貸してくれ」

王家への忠誠心など欠片も持たない男、ルイシエンが、ただの弟に諭すように話を切り出した。

第11話（後書き）

ここ数日の記憶がないですよー

第12話

イリシエン王国へ終末の宣告へ

二人きりで話したいと言った、ルイシエンとユアン以外は小屋の外にいた。

サクラ、ライズ、リリー、セルフイの四人はそれぞれ樹に背を預けて座り込んだ。

自分の家なのに追い出され、ムスツとしているサクラにセルが問いかける。

「あの、サクラさん。どうしてユアン殿下がサクラさんの家にいるのですか？」

ごもつともな疑問であつた。

サクラにユアンの居場所を知らないか聞きに来たら、予想外にもサクラの元に居たのだから。

「うーん、なんか面白い人だったから連れてきたんだよ」

答えになっていないような気がするが、どこか抜けているセルフイは成る程、と一人納得している。

そこへリリーが更に問う。

「王子殿下の護衛、此処まで連れてきた騎士がいたと思うんだけど、

そいつらは？」

「さっきの首、見たら分かると思うんだよ。基本的にわたしの領域に入った生き物は首を狩ることにしてるから」

キミ達は例外なんだよ、と付け加えてサクラは告げる。

「あ、そうだ。ご飯を探しに、せっかく外に出たのに獲物を獲ってなかったんだ。」

領域に入った反応がしたから、熊か兎が迷いこんだのかな？と思って狩ろうかと思ったら、人間だもん」

流石に人間は食べないですね？

とセルフィが呟いたのを聞き、槍を磨いていたライズが訝しげな表情をした。

「ルイ兄の考えはこうだろう。」

第一王子である私を森から救い出し、王に成るべき者だと主張し、軍を上げる。

そして反抗する宰相一族を殺し、私を王に押し上げて、英雄となったルイ兄は権力を握る。

私が王になどなりたくない事は知っているだろう」

ルイシエンは小屋でユアンを説得していた。
幼きころより、城は敵ばかりだったユアン。

父は政務などは宰相に任せ、女を侍らせ宴を開き、我が子に見向きもしない。

城内にいる官もほとんど宰相の息がかかった者ばかりで自分を見ても上辺だけの礼をするだけであつた。

唯一の味方であつた第一王妃の母は第二王妃（ケーフンの母）に毒殺された。

「最終的には、そうだ。現王国の中枢を殺し尽くす。

だがその前に北部で独立し、東部と西部をこちらに付かせる。北部だけでは勝てないからな。

東部の領主も西部の領主も、宰相一族の独断専行には不満を持つている」

宰相の出身地である南部や、王のいる中央部は北、東、西から税を絞り尽くして豊かな生活をしているのである。

北、東、西の力を合わせればイリシエン王国を崩すことは容易い筈だ。

「そういう問題ではないと言っているのだ。
たとえ勝算があつたとしても私が王などと…。

それに、何百年という歴史を持つ国を捨てて独立するなど、民が悲しむだろうし何より、属国であるイリシエンが滅べば帝国も黙ってはいない。

この不浄たる森で一生を送る方が、何倍もましというものだ」

「ユアン、王とは？

お前の言う王とはなんだ。あの鷄糞のことか？それとも先代の生塵ことか？

あんな者は王者とは呼ばぬ。愚者だ。

ユアン、お前は真の王になるのだ。臣下から信頼され、民から愛される、真の王に。

腐ったイリシエンなど滅びた方がいい。民も新たな王を望んでいる。帝国には、これまで通りの金と食糧を収めていれば問題ない。

ユアン、何百年の歴史も、このままでは終わることは目に見えている。

高すぎる税を絞られた農民は冬を乗り切れずに死んでいき、若い人間は俺達のように賊となる。そうしなければいずれ立ち回れなくなるのは必然だ」

ユアンはふと思う。

この男の目的はなんなのだろう。

王を代え、国を変え、自分は何者になるつもりなのか。

呪われた子と言われ、この国を恨んでいる筈だが、そういった事は何も話さずに正論だけを述べている。

この国の未来を救いたいと言っても言うのか？

ああ、そうか。

人だ。人を案じているのだ。

人、人、人。人が集まれば街となり国となる。

今まさにルイ兄は王なのだ。黒獅子旅団という国の王。

本来の流れであれば、いずれは北部領の王となり、そして…。

ルイ兄が言ったような真の王、それは自分自身のことではないか？
つまり今のイリシエン王国の民はいずれ自分の民になるという考えなのではないか？

そこまで考え、言ってやる。

「獅子の首は、一二つ並ばぬぞ?」

目の前の悪党が、ニヤリと嗤った。

第12話（後書き）

リリーとセルが空気だった不浄の森編

自分の文才の無さを痛感しました。

登場人物の多い小説を読むと、すごいなと思う

ユアン＝イリシエン

15歳

イリシエン王国の第一王子。

いわゆる太子だった。母はルイシエンの叔母。

王の死後、母と共に毒殺されそうになったが、毒の耐性が強く未遂に終わり、近衛騎士と共に不浄の森へ逃げる。

第13話

新王国の誕生、賊軍の規律

北部領、首都ヴァイス

「勇敢なる北部の民よ、よくぞ王国軍を倒してくれた。

先日、ユアン殿下が私の息子ルイシエンの手によって保護された。殿下は宰相に命を狙われており、少数の護衛を連れて姿をお隠しになられていたのだ。そしてその間に太子であられるユアン殿下を差し置いて、自分の血縁であるケーフン王子を王に据えてしまった！

真に王となられる御方はユアン殿下であるのにも関わらず、更に己の権力を高めようとするあの老いぼれは、この国の病である！しかも城の官全てが奴の息が掛かっているのだ。この国病は残念だがもう治すことが出来ない。

ユアン殿下の元、我らがイリシエン内部の病を一掃し、国を建て直さねばならないが、奴らはそう甘くないのだ。

先のワールス砦での戦では勝利を収めることができたが、すでに新たな軍が編成されていることが分かった。

これに対して北、東、西で同盟を組み、ユアン殿下の旗の下、我ら三領土は一つの国となって、イリシエン王国から完全に独立する！
！」

北部領、領主ルーラント「ヨジェワールの宣言に民は大きな声援で答えた。

待ち望んでいた日がやってきたのである。

南部領だけが豊かになり、北部などはただ奪われるだけの生活を変えるための革命。

それが自分達が生まれた国を捨てることになるうとも、民は喜んで受け入れたのである。

そして領主から、新たな国の王へと言葉は引き継がれる。

「北部、東部、西部の民よ…。

これまで苦勞をかけさせてしまい、申し訳なく思う。

全ては宰相の権を余りに大きくしすぎてしまった我が王家の責任だ。

今日、この時より私は父から引き継いだイリシエンを捨てる。

そして、新たな国の名はヴァレンシア王国！！

私は、諸君が奪われた財すべてを、中央王都、南部の王族、貴族から取り戻すことを誓う！！」

一際大きな歓声が、都を包む。

ヴァレスに集まった北、東、西の人々は新らたな国ヴァレンシア王国、新たな王ユアンⅡヴァレンシアを祝福し、歓迎した。

まあ、そういう訳で。

俺達、黒獅子旅団は正式にヴァレンシア王国に仕えることになった。三領のイリシエン騎士階級は白騎士、黒獅子旅団の副隊長より上の幹部は黒騎士としてヴァレンシアの騎士階級を頂くことにした。幹部以外の団員は黒騎士直属部隊として残るので実質今まで通りだ。

人数的には白騎士282名、黒騎士96名だ。

まあそんなもんだろ。

黒獅子旅団の幹部は、団長、副団長、軍総司令官、総長、隊長、副隊長、班長、副班長となかなか多い。

例えば歩兵軍の場合

総長である俺、ライズ・アッサムの下に250人程度を指揮する隊長が12人、その補佐に副隊長12人。

その下に7〜10人を指揮する班長が30人、その補佐に副班長30人。という感じで総勢3000人の軍だ。

つまり3000人中、副隊長12人、隊長12人、総長1人…歩兵軍は25人、騎士階級が頂ける訳だ。

黒獅子旅団は全体で6万7000人、そのうち軍の訓練を受けているのは8000人程度だが、人数は今も増え続けている。

北の麓の本拠地は、もう賊の根城ではなく、それなりの規模の街になっているのだ。

旅団の中には農民、商人、兵士などいろいろいるが、荒っぽい野郎が多いせいか小さな争い事は耐えれないが概ね上手くやっている。

ヴァレンシア王国誕生の一週間前、旅団の規律が言い渡された。

団員同士は勿論の事、北部、東部、西部の三領地内での命令外の私的な理由による殺人、略奪、強姦、詐欺、賄賂を禁止する。

いろいろあったが大まかに言えばこういう事だった。

つまり賊行為は自分達の領地外でやりましょう、という事だった。

ちなみに最初に規律を違反したのは歩兵軍の班長だった。

彼は北部の小さな村で盗みを働き、しかも若い娘を強姦し、その父親を殺した。

俺はその村の村長に報告を受け、即座にその班長を拘束し、その村へ訪れた。

村人の怨みの籠もった視線を受けながらも、その村の中央で刑罰を下した。

棒打ち30回を終えた時は既に死んでいた。

しかも俺にも罰があったのだから堪らない。

俺の指導が足りないからだ、とルイシエンに言われ三カ月間禁酒、山の魔獣退治、そして減禄…。

そんな話題はすぐに団内を駆け巡り、総長、隊長などの幹部は指導を徹底したという。

ルイシエン曰わく

「見せしめが上手くいったようだな。良かった良かった」

副団長兼魔導軍総長という椅子を与えられ、森から出て入団したサクラ曰わく

「ざまあ、ライズ君ざまあ。あ、ルイ君、打ち首ならわたしに任せ
てね」

だそうだ。ああ俺がいったい何をしたというのだ…。

因みにサクラ入団にはちょっとしたエピソードがあったりする。

それは森を出る三日前の事だった。

「ねえ、ルイ君。あの約束はそろそろ果たせそうなのかな？
わたしはまだ白衣の天使にはなれないのかな？」

ルイシエン、ユアン殿下、リリー、セルフィ、俺の五人でこれからの計画を話し合っていた時、会話に入ってこれないサクラが切り込んできた。

「まだ、だな。新王国誕生、これは大きな一歩だ。王国誕生後は三領からイリシエンの悪政を除外する。つまり教会もその一つで、貴族の企みを暴露して武力的にぶっ潰すから、後は時間の問題だな。」

ああ、そうだ、サクラ。

神父だか司祭だかの首でも狩りに付いて来い。

自分の夢なんだから、他人任せじゃなくて少しは努力しろ」

と、いう感じで付いて来た。

北部首都…いや、ヴァレンシア王国、王都ヴァレスの教会はもう凄惨な状態になった。

いや、だってあのサクラだぞ？

ヴァレンシア王国の誕生宣言の後、ユアン殿下によって教会はイリシエンの強欲な王族貴族による悪質な金儲けだと暴露され、信者は離れた。

その後、黒獅子旅団により教会内は血で染まり、精霊像は砕け散り、溜め込んだお布施はヴァレンシアの国庫に収められた。

精霊像の頭の部分を斬って、司祭の頭を乗せたのはサクラ。それを教会の入口の前に目立つように置いたのはルイシエン。

ひでえ。もう天使になるの諦めたほうがいい。

相変わらず悪魔か死神にしか見えないサクラだったが、旅団内での人気はすこぶる高いのだった。

本人が、白衣の天使だよっ（ニコッ）と言って歩き回ってるせいなのだろうか。

団内での女性人気順位で一氣に上位に食い込んでいる。

現在の首位はセルフイ、二位がリリーだった。変人好きが多いのか、容姿に騙されているだけなのか…。

因みにルイシエンは五位、六位くらいだった。

ルイシエンは男だが何故か女性人気順位に上げられている。なんと男性人気順位ではぶっちぎりの一位だ。

あいつは昔から可愛かったけど今は綺麗な美人系で男女問わず人気がある…って、はっ！俺は何を考えているんだ…。

話題が大分おかしな方向にズレてしまったが、要はサクラ＝サカモトが黒獅子旅団に入ったという話だった。

第14話

新しい風と大陸の反応

イリシエン王国歴426年、春
北部、東部、西部が反乱し独立。

この報せは大陸全土に一気に広まり近隣国の緊張感が高まりつつあった。

イリシエン、ヴァレンシア両国は各国に使者を送り、其々の意向を示した。

グランレーヴェル帝国

くグランレーヴェル城にてく

「ヴァレンシア王国からの使者が参られました」

「通せ」

屈強な騎士が謁見の間の扉を開く。
赤い絨毯には美しい刺繍が施されており、皇帝は金や宝石を惜しみ無く使った玉座に腰かけていた。
歳は50代前半くらいに見える。

皇帝が座る玉座より、一段下には帝国の重臣と思われる官が左右に並んでいた。

ここから見える限り、どの人間も有能であるように思える。

宰相や大臣、鎧姿ではないが、その体つきから將軍などもいることが分かる。

謁見の間には血の匂いを持ち込む事は忌避されていたイリシエンとは大違いだ。

扉より皇帝に声が聞こえる程度まで進み、柔らかな絨毯に膝を折り頭を垂らす。

「この度は、皇帝陛下にお見通し頂き恐悦至極でございます。本日は…」

「そのような挨拶はよい。余は多忙なのでな。

要件だけを聞こうか。我が属国のイリシエン王国、太子ユアン・イリシエンよ」

私が既に太子などではないばかりか、イリシエンの名すら捨てたこととは此処にいる全員が知っているだろうに。

だが、ここで言葉を間違えれば無事にヴァレンシアに帰れることは無くなる。

ルイ兄や、ヴァレンシアの民の期待に応えなくては…。

「はっ。では、畏れながら申し上げます、陛下。

現在、イリシエン王国では宰相の悪政が蔓延り、賊の急増、軍兵の暴虐、農民の餓死などが相次いで起こり、果てには高官位は宰相一族に全て奪われ辺境の官すら金で売られる始末でございます。

北部、東部、西部では税を絞り尽くされ、中央王都、南部だけが豊かな暮らしをしています。

このままでは近い将来国庫は底を尽きイリシエンは滅びるでしょう。

そこで三領の民がこれ以上の略奪を受けることの無いよう、腐りきったイリシエンを滅ぼし、再び平和な国を造るために一気団結し新王国を立ち上げたのです。

新たな国はヴァレンシア、新たな王はこの私でございます。

イリシエン全土を制圧した後はこれまで通り、グランレーヴェル帝国の属国とさせて頂きたいと考え、この場に参りました」

沈黙。

官達は口を開かず、皇帝の判断を待つのみなのだろうか。

緊張感が身を包み、冷や汗が流れてくる。

帝国にとって、長い目で見るとならばヴァレンシアの方が安定しているはずだ。

「属国となる意思があるということか。

イリシエン滅亡後は我が帝国に税を納めると。

ふむ、いいだろう。

ではイリシエン南部へ我が帝国の精鋭軍を送り込もう。ヴァレンシアは中央王都を攻めよ」

「陛下のお手を煩わせるなど、とんでもありません。
中央王都、南部領、共にヴァレンシアがすぐさま制圧してみせましよう」

豊かになった南部を、そのまま奪う算段だったか。
そうわさせない。南部貴族が溜め込んだ財は絶対に必要なのだ。

「ふん。まあよい。まだまだ若いが、王としての威厳、素質共に、
現イリシエンの王ケーフンよりは高いように思える。

我ら帝国、新王即位を祝福しようぞ」

一人の女性が私の前に現れた。

両手に大きな剣を抱え、私の前に差し出した。

「くつくつく、スレイよ。その剣は若き王には振れんだろう。もう
少し軽い物を持ってきてやれ」

周りの官がクスクスと嘲笑する。

帝国の本質は武である。

魔導師もいるにはいるのだろうが、やはり自らも剣を振ってこの大陸を制覇したという帝国では、魔法は軽んじられることが多い。

だが、いくらなんでも女性が軽々と持ってきた剣が振るえぬはずもない。

「いえ、皇帝陛下。有り難く頂きたく思います」

両の手で、しっかりと頂く。

ずしりとした重量を感じる。ものすごく重かった。

なんとか体勢を保つ事が出来たのは、ここで恥を晒して帰るものか、という意地のおかげだ。

「一刻も早く戦を収めることを、この剣に誓います」

ヴァレンシア王国、王都ヴァレス

「これが、その剣だ」

中央王都を落としたらそのままイリシエン城をヴァレンシア城とする計画なので、ユアンはヨジェワール家の屋敷に住んでいた。

会議室に集まっているのは、ユアン、ルイシエン、ルーラント（ルイシエンの父）、カナン（ルイシエンの妹）の四人だ。

「皇帝陛下から下賜された割には無骨な剣ですな」

と父が言った。

確かに宝石の一つも付いてない剣を王の祝い品として渡すのはどうだろうと思う。

手に持ってみると、異様な重量だ。

ランプの光に照らすと、黒く輝いた。

「これは、アダマントイト製だ。

帝国にしか掘ることが許されていない鉱石。

折れない、曲がらない、磨耗しない。柄から刀身まで全てアダマイタルト製とは…この剣一本でこのヴァレスが買える位の値が付くかもな」

一同が感嘆したような息をした。

だが問題は、この剣、振れる奴いるのか？

「私には振れん。持つのが精一杯だ。
彼に譲ろつか？ええと、ライズ殿に」

確かにライズなら振れるだろうが、あいつは自分の槍が気に入ってるし。

「いや、せっかく皇帝に貰ったんだ。自分で持つてろ。
その剣を振れるようになって、そのスレイとかいう女を見返してやれ」

スレイと言えば…帝国最強と名高い四天騎士の一人だったか。

四天騎士とは、帝国騎士団長のアークを筆頭とした四人の騎士のことだ。

黒獅子で互角に戦えるのは、カイゼルくらいだろうな。

サクラなら、ひよつとしたら四対一でも勝てるかもしれんが。あいつなんでもありだし。

さて、これで帝国のお許しも出たし、そろそろイリシエンを滅ぼす

戦を始めようか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7208y/>

漆黒の騎士と白衣の天使

2011年12月3日21時01分発行